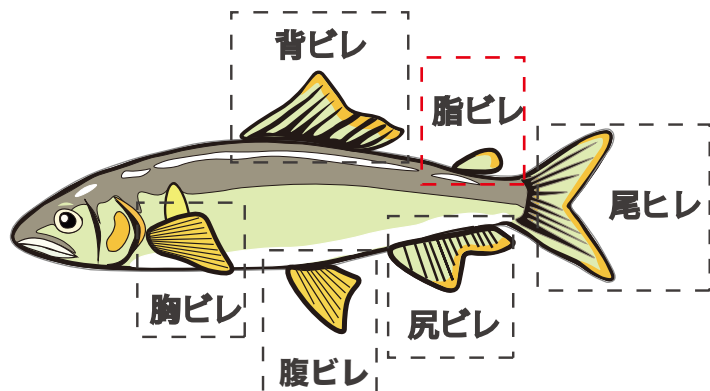


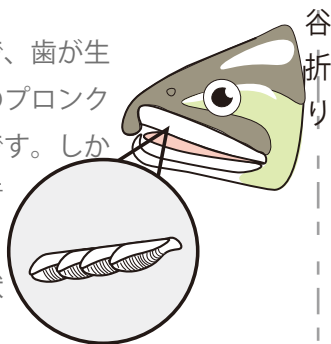
アユの体の特徴：ヒレ



一般的な魚のヒレの数は5つです。しかし、アユには6つ目の「脂ビレ」があります。ヒレには前に進む推進力やバランスを保つ大切な役割を持っているのです。

アユの体の特徴：歯

アユは幼魚から成魚になる過程で、歯が生え変わります。幼魚期は動物性のプランクトンを食べるため、鋭い歯なのです。しかし、川に遡上すると川の石に付着してる、「珪藻」という藻類に食性が変化するため、カミソリ状の歯になります。



アユの体の特徴：におい

アユは香魚（こうぎょ）と呼ばれるほど、野菜の「ウリ」のような特有の匂いがします。アユが沢山遡上していた川は川からアユの匂いが香ってくるほどだったと言われています。アユをお店で見かけた時は買って、匂いを嗅いでみてはいかがでしょうか？



アユは人間と深い関わりを持つ

アユは日本の清流にいる代表的な魚で、古くから人間と多くの関わりをもっています。漁業や食を通じて、水域一帯の暮らしを豊かにしてきました。アユは一生の中で、海と川を行き来する「両側回遊型」の魚です。場所に応じて食性が大きく変化や体色の変化するなど、とてもダイナミックな生き方をしています。森川里海と深く関わる生き物だからこそ、人間生活の影響を受けやすい側面があります。生活排水、堰やダムなど河川の環境変化によって、アユが減少してしまっている現状もあるのです。



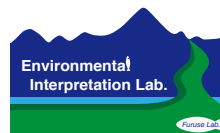
アユを守っていく私たちにできる第一歩

- ・食用油や食べ残しをそのまま排水溝に流さない！
- ・アユを知り！アユに触れて！食べてみる！
- ・身近な周りの自然や生活環境に目を向けてみる！

アニマルサイエンス学科

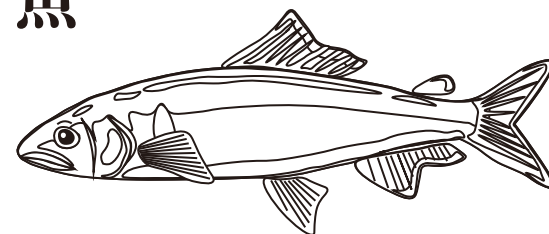
環境教育・インタープリテーション研究室

4年 宮竹一成



アユ 魚占

資料集



アユ (*Plecoglossus altivelis*)

サケ目アユ科アユ

分布域：北海道（西部以南）本州、四国、九州

生息域：中流域～河口域、湖沼

全長：10cm～30cm

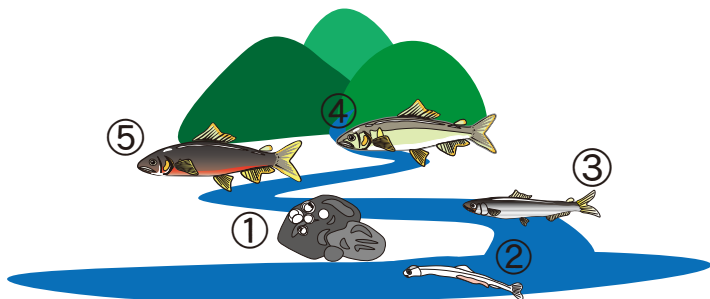
食性：幼魚期→動物プランクトン、水生昆虫

成魚→水生昆虫、石に付着した藻類（珪藻）

繁殖期：8月～12月

特徴：えらぶたの後ろに黄斑（黄色の模様が色づく）
体からアユ特有のウリのような匂いが香る

アユは海と川を一生の中で行き来する



①アユは冬から秋にかけて下流域で孵化し、川の流に身を任せ海や河口付近に下降します。夕方の薄暗い時間から下降を始め、日が登る頃には川底に沈み、捕食者から見つかりにくいように身を守るのです。このように隠れながら河口まで移動しながら成長します。

②12月から3月ごろまでの冬の間は、河口付近や海の波打ち際にアユ同士で群れ、動物プランクトンを食べながら春を待ちます。この期間に20kmも波打ち際を泳ぎ、遡上できる川を探し旅に出るアユもいるのです。

③春になり、川の水温が暖くなることを待ち遡上を始めます。5cmから7cmほどに成長したアユは、水生昆虫類を食べながら栄養を蓄え、体を大きくし中流を目指し遡上します。

④6月～7月の夏頃成魚になり、中流域まで遡上すると歯が生え変わり、石に付着している藻類を食むようになります。中には自分の縄張りを持つもの現れ、入ってきたものをヒレを立てて追い立てる習性を持つアユもできます。

⑤9月頃、秋の終わり頃下流域に下降し、オスには婚姻色という繁殖期のオスにしかでない綺麗なオレンジ色に色づきます。下流域で出会ったアユのペアは繁殖行動をして、次の年に命を繋ぎ一生を一年で終えます。

人とアユには様々な歴史がある

●鵜飼

鵜飼は水鳥の「鵜」という鳥を使って日本古来から水中の魚を獲る、使われていた漁法の一つです。鵜飼の種類は2つあり、舟から行う鵜飼と、歩きながら陸から徒鵜飼（かちうかい）があります。鵜飼は江戸時代以降から記録をされるようになり、昭和初期ごろの大地次世界大戦前ごろまで日本各地で行われていました。現在も伝統の継承で各地で披露されています。



●高級食材『アユ』

現在、お店に売られるほど一般的な魚であるアユは、江戸時代頃の日本では、とても高級な食べ物です。江戸時代には徳川の將軍家への献上品にもなっています。

「御菜鮎」と呼ばれ江戸城本丸御台所へさし上がるようにし、5月から8月毎月決まった大きさ、形、鮮度が良いアユを納めるという命令を下されていたそうです。



●様々な伝統漁法

昔の日本は豊かで綺麗な水が流れ、流域一帯を資源で溢らせていました。その中で人は様々な漁法を生み出して魚を取って暮らしていました。植物繊維や石、土などの原始的な素材で籠や竿、網などの漁具は作成され、餌は水域付近に生息する虫や鳥の羽などを使っていました。限られた環境を壊さないよう大切に昔の人はアユを獲っていました。



アユの住みづらい環境は人が関わっている

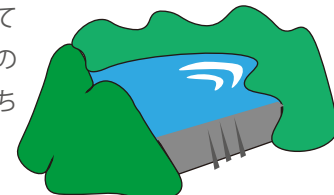
●水質問題

高度経済成長期頃、豊かで綺麗な川に生活排水や工場排水が流出していました。そして川からアユの姿が消えてしまいました。しかし、現在は下水処理場の設備の効果によって、川の水質は良くなり、日本各地でアユの遡上も確認されるようになりました。だんだんと昔のような豊かで綺麗な川を取り戻してきています。



●ダムや堰について

ダムや堰は台風や豪雨などの水害の時や、日照りが続き、水不足になってしまった時、私たちの身を守ってくれる大切な施設です。しかし、アユなどの川の魚にとっては遡上を阻害するものの一つになっています。遡上できずに下流中流域で鳥たちに食べられてしまっています。魚道の整備や河川の環境の見守る必要が私たちにもあるのではないのでしょうか。



●湖産鮎の放流問題について

琵琶湖などの湖産アユを放流する方法が現在問題になっています。大正時代から行われており養殖のコスト面や釣りやすさなどから、釣り人に好まれていました。しかし、「冷水病」という魚の体に穴が開いてしまう病気持ち込み他の魚にも影響を与えてしまうことから問題になっています。また、アユに紛れてその地域には本来いないはずのたくさんの魚が放流されてしまっています。その結果、生態系の変化が起きている場所もあると言われています。

